

『コンパクトシティの様々なパターン』

21911016 荒井四海 21911183 篠原洸
21911369 山口誠也 22011083 織田一宏

はじめに

現在日本では人口減少・高齢化社会が問題になっており、日本国内の各地方都市では持続可能性を目標としたコンパクトシティ政策が行われている。日本国内ではコンパクトシティ先進地域として富山市が挙げられる。都市に人を集積させることによって、人口減少・高齢化において懸念される課題を解決しつつ、生活を向上させ環境問題に取り組み、地域経済を循環させ都市を持続可能にする効果が期待されている。

青森市

1999年に青森市は都市計画マスタープランに「コンパクトシティの形成」を掲げて、コンパクトシティにいち早く取り組んだことから日本国内ではコンパクトシティの先進都市といわれている。都市全体をコンパクトにすることによって、雪対策がしやすいまちになり移動が簡易化になる。その為、高齢者弱者にとっても移動しやすくなる。また、まちをコンパクトにすることによって、お互いを助け合うことができることから災害への意識を高くすることができるのではないかと考えた。また、鉄道、バス等の公共交通ネットワーク化により効率的に移動ができ、快適な都市環境の形成を目指していることから自然にまちの機能が集約したことから『自然集約型コンパクトシティ』なのではないかと考えた。

富山市

富山市は2003年に策定された「商業復興ビジョン」に「基づき各施策を展開したが、商業者を取り巻く環境は変化することがなかったが、2014年に予定されていた北陸新幹線の開通により広域的な交流になることや、富山駅高層化による南北の一体化による新たな人の流れが生まれる可能性から、富山市は自律的な商業復興や基盤強化及びコンパクトなまちづくりの基本とした「富山市商業復興・活性化プラン」を2012年に策定した。この計画における都市像として「人・まち・自然が調和する活力都市とやま」を掲げた。一定水準のレベルを「串」とし、その串で結ばれた徒歩圏を「お団子」とした都市構造を目指した。

柏市

柏市は2000年に都市計画が発表され、2005年につくばエクスプレス開通に伴い翌年の2006年にららぽーと柏の葉キャンパスが開業し、集合住宅が建設された。2014年に都市の機能を集約させた「ゲートスクエア」をオープンした。2010年には千葉県、柏市、三井不動産、東京大学、千葉大学の公・民・学が連携してまちづくりが行われている。また、柏の葉キャンパスには3つのテーマがあり、「新産業都市」、「健康長寿都市」、「環境共生都市」、の3つのテーマにしまちづくりを行っている。

見附市

見附市は都市計画マスタープランに「住みたい 行きたい 帰りたい 優しい

絆のまち」を掲げ 2006 年に「第 4 次見附市総合計画」が策定された。元気や活力元気や活力、ぬくもりを生かし誰もが生きがいと
考え、住んでいるだけで健康で幸せになれるまち「ウェルネスみつけ」を未来像として掲げ、高齢者や介護が必要な人達に自立して生活を送ることができる「地域包括システムの構築」を基本方針とした。見附市では、マイカーを利用する人が多いことから公共交通機関が減少傾向であった。そのため、バスが廃線され自動車を利用できない住民の増加が問題となった。他にも、他の市の拠点、交流施設、商業施設を結ぶ公共ネットワークを強化などが問題視された。そこで、2008 年から「見附市総合計画」に基づき地域交通活性化、再生事業を利用しコミュニティバスの運行やデマンド型乗り合いタクシーといった地域交通網を形成した。

総括

コンパクトシティ戦略を行う都市に赴き、取材やフィールドワークを通し、新たなコンパクトシティ像について様々なコンパクトシティの在り方について考え、自分達で形・型に当てはめていった。

青森市『自然集約型コンパクトシティ』
市や行政が意図しない形で自然にコンパクトなまちづくりが形成されていたケース

富山市『拠点集中型コンパクトシティ』
中心地街地を設定し、その周辺に対して都市の諸機能を集積させたケース

柏市『都市近郊 ICT 型コンパクトシティ』
都市とのネットワークが結ばれており、最新技術を用いてコンパクトなまちづくりを行っているケース

見附市『他エリア連動移住型コンパクトシティ』

中心市街地に様々な諸機能の集積、活性化を行わずに周辺地域とのネットワークをつなげ、ベットタウンとしての役割を担い、生活利便性を重視したケース

このように、地方都市ごとに抱えている問題・課題が必ずしも同じとは限らず、対処方法もさまざまであることが分かった。各地方都市における課題に適した取り組みを行う必要があり、地域の特徴・個性を生かすことが最も重要になるのではないか。